21PO-am407

薬学英語学習者の達成関連感情と学習方略及び自己効力感との関連について

○児玉 典子[1], 藤波 綾[1], 細川 美香[1], 西山 由美[1], 田中 将史[1], 小山 淳子[1], 竹内 敦子[1]（[1]神戸薬大）

【背景】近年、学業場面における感情に関する研究が注目される中、感情と動機づけ及び学業成績との関連性が報告されている。また、テスト場面で生じる達成関連感情には、正感情（楽しさ・喜び・希望・誇り・感謝・安らぎ・安堵）と負感情（退屈・不安・恥・怒り・悲しみ・落胆・絶望）があり、これらの感情は学習意欲、学習方略、学習の自己調整に影響を及ぼし、その後の学習や達成を規定するというコントロール－価値理論が提唱されている。これまで我々は、薬学英語学習において感情尺度を作成するとともに、到達テスト後に生じる学習者の負感情に注目し、負感情（腹立たしさ・反抗）が正感情の正の影響要因であることを明らかにしたが、達成関連感情の負感情と正感情、学習方略、自己効力感の関連性を示唆する結果は未だ得られていない。そこで今回、池田らの達成関連感情尺度日本語版を用いて達成感情を測定し、学習方略及び自己効力感との関連性を調べた結果を報告する。

【方法】神戸薬科大学の薬学英語入門Ⅱ履修学生に対し、楽しさ、希望、誇り、安堵、怒り、不安、恥、絶望の 8 感情についての達成関連感情日本語版、学習方略、自己効力感に関する質問紙調査を授業最終日に実施し、欠損値を除く 112 名分を相関分析に使用した。

【結果・考察】相関分析結果から、「怒り」は学習方略及び自己効力感と有意な正の相関が得られたが、他の負感情では得られなかった。「怒り」はまた、「希望」や「誇り」と有意な正の相関がみられた。これらの結果から、薬学英語学習において、「怒り」という負感情は正感情（希望・誇り）の関連因子であり、学習方略にプラス効果をもたらすとともに、自己効力感を向上させる可能性が示された。また、さらなる検討が必要であるが、コントロール－価値理論に基づくと、「怒り」は、学習意欲の維持や次のテストへの動機づけ予測につながる重要な要因であると考えられる。